

## 平成 22 年度 活動報告

メータオ・クリニック支援の会 (JAM) の活動は会員の皆様からの会費によって成り立っています。

平成 22 年度は 75 名の賛助会員様、84 件のご寄付により、日本事務局が総額 4,588,172 円をお預かりし、その 82% (3,773,018 円) を直接クリニックへ拠出いたしました。残りの 11% (485,730 円) を翌年度以降の活動のための積み立て金に、7% (329,424 円) を日本国内での活動費、消耗品・備品等の需用費等に充てさせていただきました。

### 収入の主な内訳

一般収入	賛助会員費 (75 名様)	281,050 円
	寄付 (76 名様 84 件)	1,862,000 円
	書籍収入	印税費 189,000 円 売上 200,340 円
特別収入	緊急救援基金 (34 件)	690,752 円
	大阪コミュニティー財団	1,000,000 円
	みつばち倶楽部	200,000 円

JAM では、より多くの支援がミャンマー／ビルマの移民労働者や孤児に届くよう、活動の効率的な実施と JAM の活動にご理解をいただくための広報活動に努めています。

当会の活動に引き続きご理解を賜りますようよろしくお願い申し上げます。

### 平成 22 年度における活動の要旨:

現地スタッフとして医師を 8 月まで派遣し、クリニックの外科病棟において技術支援を行ったほか、院内感染予防活動を実施しました。今年度は国内の 2 団体より総額 120 万円の助成金支援を受けることができ、現地のニーズに合わせて感染隔離病棟の建設、医療器具等の寄付を行いました。また、昨年度と同様にクリニックと共同で学校保健プロジェクトを実施し、難民・移民の保健・医療に対する支援を行ってきました。

国内活動においては、当会のシンボルとなるロゴマークの公募や国内最大級の国際協力のイベント「グローバルフェスタ JAPAN 2010」への初出展など、国際 NGO としての認知度を高める試みに力を入れました。

さらに 11 月の総選挙後に起きた反政府勢力と国軍との戦闘によってタイ側へ多数の避難民が流入したことを受けて緊急救援基金を開設。34 件、総額 1,151,421 円 (内 35 万円は活動資金より拠出) の支援金をメータオ・クリニックへ直接送り、現地の情勢に応じた緊急支援を行いました。

2011 年 3 月 31 日現在、運営スタッフ 16 名、賛助会員 67 名です。

# 平成 22 年度 活動報告

## 活動報告:

### 1) 日本事務局の活動

#### ① 人材派遣と育成

昨年 6 月より派遣された田辺文(医師)が主に外科病棟を中心に技術支援を継続し、8 月で任期を終了して帰国しました。今年度のスタディツアーは 4 月より激化した反政府運動の影響でバンコク都及び周辺地域に対して非常事態宣言が発令されるなど治安の悪化を考慮し、中止となりました。しかし現地スタッフの滞在中、多くの訪問者がクリニックを直接訪れ、支援の現場を見て感じていただく機会をサポートしました。この中には医学生も多く、国際保健分野での活動の場を紹介し、情報共有を図ることで、国際保健に資する人材の育成を行いました。

#### ② 戦略的な広報活動

一般向けにインターネットやリーフレットによる広報活動を行いました。毎月 1 回会報を作成し、会員へ配信するほか、ホームページで公開しました。

ロゴマークの公募(3 月 1 日～5 月 15 日募集、6 月 1～15 日選考)を行い、9 月 5 日の総会において発表および表彰を行いました。【応募総数 195】

■シンシア・マウン賞: 東京都・高橋正広様の作品

■ターウィン賞: 東京都・若松雅通様の作品  
: 大阪府・MP グラフィック様の作品

■特別賞: 愛知県・佐々木久子様作品



シンシア・マウン賞  
JAM のロゴに決定

イベントおよび書籍の出版、講演活動の詳細は以下のとおりです。

2010/7/25 当会が編集協力した書籍『タイ・ビルマ 国境の難民診療所—女医シンシア・マウンの物語』(新泉社)発売

2010/10/2・3 グローバルフェスタ JAPAN2010 に参加し、展示ブース、ワークショップを開催  
ワークショップ「国境の診療所から見たビルマ/ミャンマーの難民と移民」(発表者: 田辺)

2010/11/16 名桜大学国際看護・公開授業「タイ・ミャンマー国境メータオ・クリニックでの難民医療支援」(発表者: 梶)

2010/12/26 NPO 法人ヒューマンライツ・ナウ「総選挙後・スーチー氏解放後のビルマの状況～現地取材ジャーナリストと医師が語る～」(発表者: 田辺)

2011/02/21 大阪北梅田ロータリークラブ卓話「タイ・ミャンマー国境 難民診療所メータオ・クリニック」(発表者: 梶)

新聞、雑誌で取り上げられたものは以下のとおりです。

## 平成 22 年度 活動報告

体験派医療人マガジン Lattice 2011 「いざ医療の現場へ」

タイ・メータオクリニック取材レポート

国境を超えて医は「生きる希望」になる

月刊大法輪 5月号「翻弄される人々」

### ③ 総会および帰国報告会の開催

9月に総会および帰国報告会を同時開催しました(参加者 52名)。帰国報告会では、1年2ヶ月の派遣任期を終えて帰国した田辺(医師)の報告に加えて、アジアプレス所属フォトジャーナリストの渋谷敦志氏をお招きし最新のタイ・ビルマ国境、メータオ・クリニックの現状を写真と共にお話いただきました。

### ④ 定例会・勉強会の開催

東京で月1回スタッフが集まり、現地を含めたスタッフ間での情報共有や支援方針の決定、イベントの準備を行う定例会のほか、各チーム持ち回りによる勉強会を行いました。8月には第2回目となる一般公開による勉強会を開催し、会員や一般参加者を交えて現地への支援方法をテーマに意見交換を行いました。

### ⑤ 物資の支援

文房具	2件(ノート、筆記用具など)
医療器械	手術用鉗 鉗子類

## 2) 現地事務局の活動

### ① 院内感染対策

メータオクリニックでは年間外来患者数 153,703 人、入院患者数 11,391 人(2009年)とタイ・ミャンマー/ビルマ国境地帯の多くの患者さんを支えています。その中にはマラリア、HIV/AIDS、インフルエンザ、結核等、伝染性疾患を持つ患者さんも多い一方で、受診患者さんは一般的に栄養状態が理想的とは言えず、感染症をうつされやすい人々です。患者、患者間、さらにはクリニックで働く医療従事者への院内感染のリスクが非常に懸念されており、その軽減のため、2005年に院内感染予防チームが結成されました。現地スタッフはこの感染予防チームに参加し、アドバイザーとして院内での感染予防対策の活動に取り組んできました。院内感染対策チームでは、医療従事者に対する院内感染予防訓練の実施、標準予防策のガイドラインに基づいた医療スタッフの行動調査および指導、設備の充足などを通じて院内感染の予防に努めています。

2010年度には感染症隔離病棟をストリートチルドレン等救済基金(大阪コミュニティー財団より)のご支援より設営しました。メータオ・クリニック内科病棟には、HIV、結核、コレラ、といった感染症

## 平成 22 年度 活動報告

を持つ患者が入院しますが、これまで、すべて同室で治療を受け、清掃が困難な面が荒いコンクリート床に直接臥床しており、感染予防の観点から理想的とは言いがたかいものでした。新感染症隔離病棟はクリニックスタッフの監視・労務提供のもと 10 月 13 日に完成し、同時に結核患者の収容を開始しました。2011 年 1 月より消化器感染症の収容も開始しています。



感染症隔離病棟 改築前



改築後

### ② 学校保健支援

タイ・ターク県には、ミャンマー／ビルマ移民の児童のための教育施設が 62 校存在しています。当会はクリニックと共同で学校保健プロジェクトを行っています。初等学年を有する学校に対して学校保健評価を実施。優秀校の表彰式を通して学校保健改善の動機付けを行うと共に、国際 NGO や現地のコミュニティー組織と学校保健改善の評価を共有しています。

昨年度後半は日本人専任スタッフが不在でしたが、メータオ・クリニック学校保健チームで学校保健自己評価の説明会、評価票の回収・分析、スタッフによる訪問調査を行いました。移民児童数の増加と、それに伴う移民学校数の増加から、安定したサービスを継続するため、数多くの支援団体へのアプローチが必要です。またそのコーディネートが重要となってきています。メータオ・クリニック学校保健チームは、移民学校支援団体が顔をそろえる学校保健連絡会に出席し、自らの保健調査をもとにした情報提供を行いました。この結果は他の支援団体の効率的な支援に結び付けられています。

### ③ 診療病棟での勤務を通じた技術支援

メータオクリニックでは、クリニックで独自に教育を受け医療スタッフとして診療活動を行うスタッフ(メディック)が中心に診察、治療をしています。スタッフの学ぶ姿勢は実に真摯ですが、正式な教育課程はないため on the job training(現場研修)が中心となります。また座学のカリキュラム自体も試行錯誤とその時教えるメンバーがいるかどうかで変更されていきます。JAM 現地スタッフは

## 平成 22 年度 活動報告

診療業務だけではなく、診療を通じたスタッフの教育、ニーズや即したカリキュラムの構成、新人講義、ステップアップ講義などを行い技術支援に努めました。